

秋

やへむくら秋のわけい風の色をわれまにとそしかは啼なる
今よりとちきりし月を夜としていく秋なれぬ山の樺に
旅人のそてふきかへす秋風にゆふ日さひしき山の樺

つまねりみちふみならす山人もこの夕まきや猶迷らん

色わかぬ秋のけふりのさひしきはやとよりをらのやとにたく味

秋の夜はつむといふ草のかひもなしまつさへつらま住吉の渡

山水のたえゆくをとをきてとへはつもあらしのいろを埋める

よしさらはともなひはてよ秋の月こけのいはやに世は春とも

影を又あかすも月のそふる哉おほかた秋のころの衣に

色にいて、あまの梢そうつりゆくむかひのみねのうか小坏

昔たに猶ふるさとの秋の月しらすひかりのいく廻とも

おもふとも今ほのころし秋の色よ寒く風にこの糞糞けぬ

かり人の袖こそうたてしほれぬれつゆふか草の里の鶴に

衣うつひつきそ風をしだひくる梢ほとをき月の隣に

をく類にむすひはてつるのほも哉つゆのひかりも花の匂ひも

よろつ世とちきれる月の影なればおしまてくらす秋の客人

冬

をらの山こなたのそらのむらしくれくもればかゝるころのうき雲

家おすると山かすその神な月あけぬくぬと時雨をそ聞

このはらるいたまの月のくもらすはかほろしくれをいかに分まし

月やそれすこし秋あるまき哉ふかき霜夜の菊の薫に

さひしとよをきまふしもの夕まくれをかやのこやのへのひと行

物おもはぬ人のまけかし山さとのこはれる池にひとりなく筑

はしたかのかへちしらふに霜をきてをのれさひしきをのし原

- 一五三三
- 一五三四
- 一五三五
- 一五三六
- 一五三七
- 一五三八
- 一五三九
- 一五四〇
- 一五四一
- 一五四二
- 一五四三
- 一五四四
- 一五四五
- 一五四六
- 一五四七
- 一五四八
- 一五四九
- 一五五〇
- 一五五一
- 一五五二
- 一五五三
- 一五五四
- 一五五五

かつ見つゝわか世はしらぬはかなさよことしくれぬけふも曾と
ゆくとしこのさのみすきゆくはてよさはいづれかひとつかへる河瀬
くもさえて葉のはつ雪ふりぬれはありあけのほかに月を残れる
山ふかき雪やいかにと思いつるなごけ許の世こそ難行れ

いとしくやまぬのそてやこほるらんかへる河風身に寒くして

雪うつみ氷をむすふをしかのかけとたのめる池のま管を

すみかまやをものゝさと人あさゆふは山地をやくとゆき還つゝ

かまぐらすみやこの雪も白かすへぬけさいかならんこしのしら山

おもふとていふかひもなきおほそらすへはや年のこえぬ閑とて

志

むねの内よしれかしいまもくらへ見はあさまの山はたぬ煙を

しるへしてなる心のかひをなき君をおもひのつもる年々

かはりゆく袖の色こそ悲けれねをなくけてよ秋のうつ蟬

今はみなおもひつくはの山おろしよけきなけ木とふきも伝へよ

かたみかはしるへにもあらず君こひてたつくとむか小雲身縁

たれゆへにたえぬとたにも白雲のよそにやかくて思消なん

おもかけはたつたの山のはつもみち色にそめてむわを煮る

おくらよりなけきそいと教まざるむなしく白のみつもる朝は

露時雨さてたに人に色見せよなめしまのすまのあざ芽に

なり見はやしほもかけをやとすやと手にむすはるゝ水の泡とも

をのつからはるすまはともたのむらん雲につけたる鳥のふる葉は

たまほこのゆくてのみちもすまわぬおもふあたりのやとの梢は

みたれあししたのこひちよいくよへぬ年ふるたつひとらなく草

人こころしものかれ葉のさとふりてやかてあとなしものと葉に

いとしくたえぬなけ木はすまの松我よりこゆる浪の高さに

- 一五五六
- 一五五七
- 一五五八
- 一五五九
- 一五六〇
- 一五六一
- 一五六二
- 一五六三
- 一五六四
- 一五六五
- 一五六六
- 一五六七
- 一五六八
- 一五六九
- 一五七〇
- 一五七一
- 一五七二
- 一五七三
- 一五七四
- 一五七五
- 一五七六
- 一五七七
- 一五七八
- 一五七九

いかさまにせきかとうめむいろがほる人のこのはのすまのしら漕
年月は昨日はかりの心抱して見な水し灰のなきまき多かる

一五八〇
一五八一

いかにせんほてなき人は世にもなしとまらぬ駒のかけは過ぬる
昔のしたにうつまぬ名をほのこすともはかなの道やし嶋の奇

一五八二
一五八三

かのさしにこのたびわたせのりの舟うまれてしゆるふるさとの河
みかさ山小もと許したつねもあらまほおふふみとの選

一五八四
一五八五

なにはかたいかなるあしかつみをきしせうにその身のおとならぬ家
なくさめは秋にかきらぬそらの月ほるよりのちもおもかけの花

一五八六
一五八七

さてもうしこしとも春をむかへついなかめくむはての霞よ
いつかばはうき世の夢をさますへまわか思ふ山の峯の嵐に

一五八八
一五八九

いそかはや思ふ小によらぬ契りあらはすまでもやまむくさの庵を
たれもきけなくねにたつるかりの世ゆきてはかへるきたと南と

一五九〇
一五九一

つねに又いかたにうき名のとまらん心ひとつ世とは懸れと
三代をへてほしをいたく年ふりてまくらにおつる秋のはつ霜

一五九二
一五九三

如何せんぬ山の月はしたへとも猶思をくつゆのふる郷
さまくはほるのなかはそあはれなるにしの山のはかすむゆ太陽に

一五九四
一五九五

いかて猶まどひしやみをあきらめんこのとふ方をとらす先
山家

一五九六
一五九七

小もとにや茶たつくもとなかむらんわかあけほのにおはぬ桜を
山ふかみ人は昔のやとよりて月よりうきまにのきを傾

一五九八
一五九九

心からまき心させぬすまひ故ねやよりおろすまつ風の声
滝のをとにありしふきをふあけたはならはすかほにゆめを驚

一六〇〇
一六〇一

うきよりはずみよかりけりと許ふあとなき霜にすきたる庭
年へぬなやとたらいつるしぬかもとよりぬしいしもこけ青くして

一六〇二
一六〇三

わけのほるいほのさきはらかりそめにことらふきてもつゆは雲つ
いくとせを見しはのとは人すまて石井の水にしける萍

一六〇四
一六〇五

わかやとのひかりととしてわけいれは月かけしうしみやまへの秋
影たえて山もやめしはしのふらんむかしせきれし水の流に

一六〇六
一六〇七

山さとの門田よきす夕風ばかりいほのうへもにはふ秋寂
たらかへり山地形がなしきゆふへ今今はかきりのやとを求て

一六〇八
一六〇九

我をあらぬ雪ほむかしにたれともたれかはとんん冬の山陰
いさうらはたつねのほりてせきすへむたこのうへを月のいる岑

一六一〇
一六一一

そのつからしらぬあるしものこしけりやともるすまきもの心は
あらしく月のあるしはわれけとり花こそやと人も尋れ

一六一二
一六一三

旅

おもかけのひかふる方にかへり見るみやこの山は月織として
いとらしくいへ地へたつる夕霧にあまのもしほ火けよりたら沫

一六一四
一六一五

ふるさとのそらさへあらくぬ心地哉ほとなき床のをかやよく登
旅衣そてよく風やかよふらんわかれていてしやとの簾に

一六一六
一六一七

たらぬる日かすにつけておもなれぬ茶なるくも谷の水も
いてこしほるはふゆのにかはるまでもとの契りを猶ゆ馮まん

一六一八
一六一九

おきをあめるこやのかりねのたひとよ風にまたくよひの燈
すきゆけと人のこえするやともなし入江の浪に月のみを渡

一六二〇
一六二一

たのむ我その名もしらぬみ山木にしる人えたる松と杉とを
あくらよりふるさとをき旅まくらん心をやかてうらしまの函

一六二二
一六二三

有つとまたれしもせぬをかのかけひとよのやとにをかやとを蔓
くらかりしわかこまの竹のかはるまでのほりをなつむ峯の巖に

一六二四
一六二五

山をこえ海をなむる大いのみちもの家ほをしを九たる
もちともにくりあひける旅まくらんみだをそなくぼるの盤

一六二六
一六二七

人のくる夜は長月のつゆしもよ身さへくらにしとこの鞍に

こし方もゆきまきも見ぬ浪の上の風をたのみにとはす舟の帆

一六二八

秋十二首

きたへの枕にのみぞしられるまたしの、ぬの秋の初風

一六四八

秋きぬとたかこのはかつけすのしおもひつたの山のつ下ゆ

一六四九

あはれ又けふも暮ぬとなかめする雲のはたてに秋風ぞかく

一六五〇

さとはあれて時ぞともなき度のおも、もとあらの小萩秋は見えけり

一六五一

秋風にわひてたまちる袖の上をわれとひかほにやとる月哉

一六五二

年ふれは涙のいたく、もりつ、月さへすつる心地こそすれ

一六五三

今よりはわか月かけと契りまかんのはらの庵のゆく末の秋

一六五四

たれもきくさやな、らひの秋のよといひてもかなしさをしかの声

一六五五

秋風にぞよ田のものいねかてにまつあけかたのはつかりのゑ

一六五六

露さえてねぬ夜の月やつもるらんあぬ浪のけさの色哉

一六五七

ひとりきくむなしきはしに雨おちてわかこしみちをうつむこからし

一六五八

年このつらさとおもへとうとまればすた、けふあすの秋のたくれ

一六五九

冬七首

けふやへに冬の風とおもへともたへすこきおろすよもの木のほか

一六六〇

霜うつむむの、しのはらしのふとてしはしもをかぬ秋のかたみ

一六六一

神な月うつちぬるゆめもつ、にもこのはしくれとみちはたえつ、

一六六二

あしかものよるへのみきはつら、ゐてうきねをうつすおきの月かけ

一六六三

たまほこのみらしろたへに降雪をみかきて出るあざ日かけ哉

一六六四

ぞなれ松こそまくだくる雪折にいは打やまぬ浪のさびしき

一六六五

あたらたまの年のいくとせくれぬ覽おもふ思ひのおもかはりせて

一六六六

雜十二首

君かよはたかの、山にすむ月のまつらんやうに尤そふまで

一六六七

うこまなき君かみむろの山水にいくちよ法の末をむすはん

一六六八

仁和寺宮五十首 建久元年夏

詠五十首和歌

左近衛権少将藤原定家

春十二首

いつしかと、山のかすみたちかへりけふあらたまるはるのあけほの

一六二九

わかなつむ宮このへにうちむれて花かぞ見る峯のしら雪

一六三〇

うくひすはなけともいまたふるさとの雪のした草春をやはしる

一六三一

おほそらは梅のほほにかすみつ、くもりもはてぬ春のよの月

一六三二

新古 道のへに誰うへをきてふりにけむの、れる柳はるはむすれす

一六三三

しもまよふすらにしほれしかりかねのかへる翅にはるさめぞふる

一六三四

おもかけに、こひつ、まぢし梅花ぞけはたらそふ峯のしら雲

一六三五

春をへて雲とふりにし花なれと猶みよしの、あけほの、そら

一六三六

新古 さくら花うつりにけりなど野をなけきもあへすつもる春哉

一六三七

春の夜の夢のつきはしとたえして峯にわかる、よこくものすら

一六三八

年ふともむすれむ物かかみ風やみもすそ河のはるの夕暮

一六三九

ゆくはるまわかる、方もしらくものいつれのすらをぞれとたはれむ

一六四〇

夏七首

へたてつなけふだちかかふる夏衣、ころもまたへぬ花のなごりを

一六四一

たかためのなくやそ月の夕とて山郭公猶またるらむ

一六四二

新古 山のはに月もまらぬ夜をかきね猶くものほる五月雨のすら

一六四三

ゆふくれはいつれのくものなごりとて花たち花に風のふくらん

一六四四

新古 夕たちのすきのしたかけ風よき夏をよそにみわの山もと

一六四五

打なひくしけみかしたのさゆりはのしらねほとにかよふ秋風

一六四六

47 松かけやさしによる浪よる許しはしそす、むすみよしのはま

一六四七

述懐三首

あすしらぬけふの命のくるゝまに此世をのみもまつなけく哉

一六七九

かはかりとつらみすてつるうき身ほどつまれんのちの猶かたき哉

一六七〇

たちかへり思ふこそ猶かなしけれ名はのこるなる春のゆくえよ

一六七一

閑居二首

新古

わくらにはとはれし人も昔にてそれより庭のあとはたえにき
のこる松かはる木くさの色ならすく月日もしらぬやと哉

一六七二
一六七三

旅三首

新古

大い衣きなれの山の峯のくもかさなるよはをしたふ夢哉

一六七四

ことへよおもひおきつのはまらとりなくくいてしあとの月かけ

一六七五

おもかけの身にそふやとに我まつとをしまぬくさやしもかれぬ覽

一六七六

眺望二首

かへり見るもよりしたのふるさとにかすむ楢は春のわかくさ

一六七七

わたのはら浪とぞらとはひとつにている日をうくる山のはもなし

一六七八

院五十首 建仁元年春

春日應 太上皇 製和歌五十首

正四位下 行左近衛権少将兼安五権小臣藤原朝臣定家上

春

にはのうみやけふよりはるに逢坂の山もかすみてうら風ぞ吹

一六七九

白妙のそてかぞ思わかなつむみかきはらの梅のはつ花

一七八〇

かすむよりうつくひすさひふく風にと山も匂ふ春の曙

一七八一

心あてにわくとともわかし梅の花ちりかふさと春のあは雪

一七八二

あつさういざへのこまつ春といへはかはらぬ色も色まざりけり

一七八三

もちとりこゑもとにかすむ日に花とはしるしよもの白雲

一七八四

千世までの大宮人のかさしとやくもゑのさくら匂ひそめけん

一六八五

はるかすみかさなる山をたつねどもみやこにしかし花のにしきは

一六八六

春やいかに月もありあけにかすみつゝ楢の花は庭のしら雪

一六八七

年の内のささらさやよひほともなくなれてもなれね花の傍

一六八八

夏

さくら色の袖もひとへにかはるまでつうりにけりなすく月日は

一六八九

春かれていくかもあらぬを山風にはすゑかたよりなひくした草

一六九〇

神まつるう月まちいて、さく花のえたもとをくにかくる白ゆふ

一六九一

はるかなるはつねはゆのか郭公くものたうちほうつゝなれとも

一六九二

さみだれの月はつれなきみ山よりひとりもいづる郭公哉

一六九三

ことわりやうちふすほとも夏の夜はゆふつけ鳥の眺の声

一六九四

夏の日をみちゆきつかれいなむしろなひく柳にすゝむかは風

一六九五

かけやとす水のしら浪たちかへりむすへとあかぬ夏のよの月

一六九六

山めぐりそれかと思したもみらうちうくる暮の夕立の雲

一六九七

夏はつる肩につゆもどきすめてみそきすゝしきかも河かせ

一六九八

秋

あきかせよそやおきのはこたふともわすれね心わが身やすめて

一六九九

ゆふつくよいるの、おほなほのく風にそつたふさをしかのこゑ

一七〇〇

玉匣ふたみのつらの秋の月あけまつくらさあたら夜のぞら

一七〇一

秋のよは月の程も山のはもあらしにはれてくもゝまかはす

一七〇二

秋をへて昔はとをきおほそつにわか身ひとつのもの月かけ

一七〇三

つゆおつるならの葉あづく吹風になみたあわそふ秋のタくれ

一七〇四

はつかりのたよりもすくる秋かせにことゝひかねて衣うつ声

一七〇五

たをやめ袖かもみちがあすか風いたつらにふくきりのをちかた

一七〇六

山ひめのぬさのおび風ふきかさねちひろの海に秋のみちは

一七〇七

ものごとくにわすれかたみのわかれにてそまたにのちとくる、秋哉

一七〇八

冬

月日のみすきの業しくれなく嵐冬にもなりぬ色はかはらて

一七〇九

神な月しくれてきたるかさ、きの羽に霜をききゆるよのぞて

一七一〇

ふゆかれてあおほも見えぬむらす、き風のならひは打なびきつ、

一七一〇

と山よりむらくもなびき吹風にあられよきる冬の夕くれ

一七一〇

さえとおる風のうへなるゆふつく夜のたる光にしもそちりくる

一七一〇

おほよどの松に夜ふくる浪風をうらみてかへる夜ちどり哉

一七一〇

ななかめつ、夜わたる月にくしものすきてあとなき一とせのそら

一七一〇

神さひていはふみむろの年ふりて糟ゆふかくる松の白雪

一七一〇

春しらぬたくひをとへはみかさ山このころふかき雪の埋木

一七一〇

日もくれぬことしもけふになりけりかすみ雪になかめなしつ、

一七一〇

雑

冬方のあまてる月日のとかなる君のみかけまたのむはかりそ

一七一九

秋つしまほかまで浪はしつかにて昔にかへるやまことのは

一七二〇

あふけどもくたへぬそらのあおみとりむなくはてぬゆく末も我

一七二〇

わか友とみかきの竹も哀しれよ、まてなれぬ色もかはらて

一七二〇

なげかすもあらざりし身のそのかみをうらやむはかりしつみぬる哉

一七二〇

身をしれは人ももよをもうらみねとくちにし袖のかは日ぞなき

一七二〇

と、せあまみとせはふりぬよるの霜をきまよふ袖にはるをへたて

一七二〇

わかたのむ心のそをてらし見よみもすかはにやとる月かけ

一七二〇

かすかのやしだもえわふるおもひくさきみのめくみをそらにまつ哉

一七二〇

くもりなき日よしの宮のゆふだすきかくるおもひのいつかはるへき

一七二〇

院句題五十首 建仁元年十一月

冬日同詠五十首應 製和歌

正四位下行

初春梅花

春霞かすみそめぬると山よりやかてたらそふ花の傍

一七二九

山路尋花

みよしの、はるもいひなしのそらのかとわけける業た、ほへしらく

一七二九

山花未遍

山影は猶まらわびぬ花いたりいたらぬはるをうらみて

一七二九

朝見花

かすくにききそふ花の色なれや峯のあさけのやへのしらくも

一七二九

速村花

たれかすむのはらのすえの夕かすみたちまよはせる花のこのもと

一七二九

故郷花

あすか河かはらぬはるの色なからみやこの花といつにほひけん

一七二九

田家花

はるをへてかとなにしむる苗代に花のか、みのかけそかはらぬ

一七二九

古寺花

ちらすなよかまきの山の桜花おほふ許のぞてならずとも

一七二九

花似雪

みよしのに春の日かすやつもるらむ枝もとま、の花のしら雪

一七二九

河辺花

すくか河やせの波のはるの色はふりしく花のふちと、そなれ

一七二九

深山花

山ふしの人もきて見ぬこけの袖あたら橙を打はらひつゝ

一七五九

暮山花

たれと又くものはたてにふきかよふあらしの峯の花をうらみん

一七四〇

古溪花

山人のあとなきたにのゆふ霞きたへぬ花にほふはるかせ

一七四二

閑路花

さくら色によもの山風そめてけり衣のせきのはるのあけほの

一七四二

霽中花

おもふ人心へたてぬかひもあらしさくらものくものやへのまぢかた

一七四三

湖上花

さなみやさくらふきかへすうら風をつりするあまのそてかぞえ見

一七四四

橋下花

あともなき山ちのさくらふりはへてはれぬしるきたにのしほし

一七四五

花下送日

このもにまらしにくらをおしむまでおもへばとをきふる郷のそら

一七四六

庭上落花

はるの色ときえすはけさも見ざる許すこし槍は花のこころて

一七四七

暮春惜花

いかにせむはるもいくかのさくら花方もたぬぬ風のにほひを

一七四八

初秋月

つゆやをくやとかりそむる秋の月またひとへなるうたゝねの袖

一七四九

月前草花

宮きのに風まらわふる秋のえの露をかそへてやとる月かけ

一七五〇

雨後月

かきくもりわひつゝねにしようたになかめしそらに月やはれゆく

一七五二

松間月

秋のつゆもたゝわかたのやをかへなる松のはわけの月の衣手

一七五二

山家月

をのつから身を宇治山にやとかれはさもあらぬそらの月もすみけり

一七五三

月前竹風

ふしわひて月につかるゝ道のへのかきねの竹をほらふ秋かせ

一七五四

野径月

めぐりあはむそらゆく月の行来もまたはるかなるむぎしのこほら

一七五五

沢辺月

人しれぬあしまに月のかけとめていり江の沢に秋風そぶく

一七五六

月前開馬

白妙の月もよむに風さえてたれに衣まかりのひとこゑ

一七五七

浦辺月

浪風の月よせかへる秋の夜をひとりあかしのうらみてそぬる

一七五八

月照滝水

秋の月そてになれにし影なからぬるゝかほなるぬのひきのたき

一七五九

杜間月

つゆにうつる月より秋の色にいてゝときはの杜のかけそかひなき

一七六〇

月前秋風

吹はらふとこの山風さむしうに衣手うすし秋の月かけ

一七六一

江上月

志却又兼
難見すみの江の松かねあらし浪のかけてよるとも見えぬ月かけ
昔方不及

一七六一

月前虫

よるの風さえゆく月にたか秋の衣をりはへ虫のわふらむ

一七六二

月前開鹿

秋のくにさくわくるいほのしかのねにいくよつゆけき月を見つらん

一七六四

旅泊月

むしあけの松としらせよ袖の上にしほりしまの浪の月かけ

一七六五

月前草齋

草の原月のゆくえにまつくつゆまをかてきえねと吹嵐哉

一七六六

菊籬月

しらくくのまかきの月の色許うつろひのころ秋のはつしも

一七六七

暮秋晚月

いまいくか秋もあらしのよこくもにいづればしらむ山のはの月

一七六八

寄雲恋

純松
しられしなちしほのこの葉かるともしくるくもにいろし見えね

一七六九

寄風恋

いかにせんじともたのぬくれ竹の末葉ふきこす秋風のこゑ

一七七〇

寄雨恋

あまそんきほとふるのきのいたひさしひさしや人のもとせしまに

一七七一

寄草恋

今はとてわするゝたねやしけりにしわかすむ里はのきのした草

一七七二

寄木恋

せくそてよせよのむもれ木あらはれて又みす浪にくちやはてなん

一七七三

寄鳥恋

かりにたにとはれぬ里の秋風にわか身うつらの床はあれにき

一七七四

寄嵐恋

わひはつるわか思ひねのゆめちさへ契りしられてふく嵐哉

一七七五

寄船恋

こぬ人をつきせぬ浪にまつら舟よるとは月のかげをのみよて

一七七六

寄琴恋

かたみよとたのみしことのかひもなぐつぎなかのをのたえやはてな

一七七七

寄衣恋

見しかげよさてやまあるのすり衣みぞきかひなきみだらしの浪

一七七八

女御入内御屏風哥 文治五年十二月

月次御屏風十二帖和歌

正月

小朝拝立立の所

野辺小松原に予日する所

こまつはら春の日かけにひきつれて千世のけしきまそつらに見る哉

一七七九

山野に霞立わたりたる所 庄吉松もあり

春かすみいまゆくすゑをしこのて思ふもときき住吉の松

一七八〇

二月

春日祭社頭儀

みかさ山さしけるつかひけふくれはすきまに見ゆる袖の色々

一七八一

花甲に鶯ある所人家あり

さとわかぬはるの光をしりかほにやとまたつねてきめる鴉鳥

一七八二

人家并野辺に梅花さきたる所

まちこちのにはひは色にしられけり横の戸すくる梅のした風

一七八三

一七八四

三月

沢迎春駒

はるふかくさはへのまこも、えねれはたちもはなれすあさる駒哉 一七八五

山野井人家に桜花盛まきたる所

もう人の心にかはる花さかりのとけきみよも色に見えけり 一七八六

人家の庭に藤盛にひらけたる所

はるの日のひかりてります庭のおもに昔にかへるやとの藤波 一七八七

四月

人家に更衣したる所 卯花かきねあり

けふこといひとへにかふる夏衣猶いくとせをかさねてかきん 一七八八

賀茂下御社神館迎葉付たる人衆所

千早振かものみつかき年をへていくよのけふにあふひなるらん 一七八九

早苗つへたる所

あめのしたけしきもしるくるとるなへは水を心にまつまかする 一七九〇

五月

人家の雲間に郭公ある所

いくさとの人にまたれてほと、さすやとの梢に声ならず覽 一七九一

昌蒲かりたる所 又人家に葺たる所もあり

あやの草なかさきりをねぞへて千世のさ月といはふけふ哉 一七九二

人家庭になてしこぎきたる所

たねまきてちりたにすへぬ床夏の花のさかりは君のみそみむ 一七九三

六月

山井辺に人々納涼したる所 人家あり

なかき日に春秋とあるやとやこれむすへは夏もしらぬまし水 一七九四

野辺社間に夏草しける所

わけゆけは夏のふかきしられる杜の下草すまもはるかに 一七九五

河辺に六月秋したる所

みそきてむすふ河なみ年ふともいく世すむへき水のながれそ 一七九六

七月

山野井人家に秋風吹たる所 萩あり

てる月のひかりそふへき秋さねときくもす、しき萩のうは風 一七九七

野花盛開て人々集たる所

をしなへて花に心はいりにけり野へのちくさまわくるもろ人 一七九八

春日野に鹿ある所

かすか山あさひまつまのあけほのに鹿もかひある秋とつくなり 一七九九

八月

人家池辺に人々觀月所

あまつ風みかくもるにてる月の光をうつすやとの池水 一八〇〇

会坂關駒迎に行向所

開水の影もさやかに見ゆる哉にこりなきよのもち月の駒 一八〇一

田中に人家ある所

秋ふかき山田のなるこそしなへておさまれるよのためしにそひく 一八〇二

九月

山中に菊盛に開たる辺に仙人ある所

かきりなき山らの菊のかけなればつゆもやちよま裂りまさらん 一八〇三

山野井人家紅葉盛なるを人々觀所

うつしうふる花も紅葉もおりことたつぬる人の心をそ見る 一八〇四

海辺に霧たちたる所

たちまきさるうらわのさりになか月ひかすはかりとあらはにそみる 一八〇五

十月

海辺に千鳥ある所 海人しほやあり

きみかよをやらよとつくるさよちとり鳥のほかまでこゑきこゆ也

一八〇六

あしろに入あつまりたる所

このころはせくのあしろに日をへつゝ事とふ人のたゆるまきなき

一八〇七

江沢辺に寒窟しける所 つるあり

ゆくすゑもいくよのしもかききそへむあしほにみゆるつるのけ衣

一八〇八

十一月

五節参入の所

白妙の天のは衣つらねきてをとのまちとる雲の通り

一八〇九

賀茂臨時祭社頭儀式 上御社

ふるそてはみならし河にかけさえてさらにはすめるうとはまの声

一八一〇

野辺に鷹狩したる所

いそきたつ日なみのみかり雪ふかしかたのゝをのゝ冬あけほの

一八一

十二月

内侍所御神楽儀式

そらさえてまたしもふかきあけたにあかほしうたふくもの上人

一八一二

山野樹竹雪ふりつみたる所 人家あり

くれ竹も松のすゑはおれふして千世をこのたる雪の内哉

一八一三

歳暮に下人等白山松切て出たる所

民もみな君かやちよをまつかえにかすとりそむる年のくれ哉

一八一四

泥絵御屏風和歌

夏

樹陰納涼

すゝみにとみちはこのまにふみなれて夏をそたとるもりの下かけ

一八一五

冬

池辺水

やとからは夜をへてこぼる池水もかきぬむちよのかけそ見えける

一八一六

入道皇太后宮大夫九十賀算屏風歌

屏風歌十二首

建仁三年八月被撰定

左近衛權中将藤原定家

春

霞

若菜

花

夏

郭公

五月雨

納涼

秋

秋野

月

紅葉

冬

千鳥

水

雪

花山のあをたつぬる雪の色に年ふる道の光をそ見る

一八一七

家勝四天王院名所御障子歌

名所御障子和讃

正四位下行左近衛權中将藤原朝臣定家

春日野

かすか野にさくや梅かえ雪まよりけふはるへとわかなつみつ

一八二八

吉野山

みよしのは花にうつつ小山なれば春さへみゆき故郷のせら

一八二九

三輪山

けふこそはみわのひはらの郭公ゆくての声をたれかきかまし

一八二〇

龍田山

たつた山よもの梢の色なからしかのねさ小秋の河風

一八二一

泊瀬山

をばつせや峯のときは木ふさしほり嵐にぐもる雪の山もと

一八二二

難波浦

赤の色はけふこそみつのうらわかみあしのわか葉をあらふしら浪

一八二三

住吉浜

しらさぐのにはひし秋もわすれ草おふてふ岸の春のうら風

一八二四

葦屋里

あしのやのかりねの床のふしのまにみしかくあくる夏のような

一八二五

布引滝

ぬのひきのたきのしらいと夏くれはたえすそ人の山ちたつぬる

一八二六

生田社

秋とたにふさあへぬ風に色かはるいくたのもりの露のした草

一八二七

若浦

よるのつるなくねふりにし秋のしもひとりさほさぬわかうら入

一八二八

吹上浜

しほ風のみきあけの雪にさそはれて浪の花にそはるはさきたつ

一八二九

交野

風をいたみかたのゝとたちしたはれてしのかかれはにあられふる也

一八三〇

水成瀬河

此里においせぬ千世はみなせ河せきいるゝ庭のさくのした水

一八三一

鵜磨浦

すまのあまのなれにし袖もしほたれぬ聞ふきこゆる秋のうら風

一八三二

明石浦

あかしかたれいさをもちもしらつゆのまかへの里の浪の月かけ

一八三三

志加麻市

さみか世は誰もしかまのいちしるく年ある民のあまつそら哉

一八三四

松浦山

たちちめやまたもうこしまつら舟ごとしもくれね心つくしに

一八三五

因幡山

これも又わすれし物をたちかへりいなはの山の秋のたくれ

一八三六

高砂

たかさこの松はつれなきおのへよりのれ秋しるさをしかのこゑ

一八三七

野中清水

たまほこのみちの夏草すゑとをみのなかのし水しはしかけみむ

一八三八

海橋立

ふみも見ぬいくのよそにかへるかりかすむなみまのまつとつたへ

一八三九

宇治河

あしう水や波のきりまに袖見えてやさうち人は今かとふらむ

一八四〇

鏡家

大井河

おほろかほはまれのみゆきに年へなる紅葉のふなちあとはありけり

一八四一

鳥羽

もう人もちよのみかけにやとしのてとはに逢みん松の秋風

一八四二

伏見里

ふしみ山つまとふしかの涙まやかりほの庵の萩の上の露

一八四三

泉河

いつみ河かはなみきよくさすさほのつたかた夏まくのれけちつゝ

一八四四

小塩山

はるにあふをしほのこ松かすくゝにまざるみとりの末々久しき

一八四五

会坂關

今はとてうくひすさそふ花のかに逢坂山のまつかすむらん

一八四六

志賀浦

しかのうらや水もいくへぬるたつのしものはけに雪はふりつゝ

一八四七

鈴鹿山

秋はきてつゆはまかふとすゝか山ふるもみちはに袖さうつろふ

一八四八

二見浦

ますかゝみかたみのうらにみかゝれて神風きよき夏のよの月

一八四九

新田

おほよどのうらにかりほすみるわたに霞にたえてかへるかりかね

一八五〇

鳴海浦

なるみかた雲の衣手ふきかへすうら風をもくのこる月かけ

一八五一

浜名橋

きりはるゝはまなのはしのためえくゝにあらはれわたる松のしき浪

一八五二

宇津山

うつの山うつる許の峯の色はわきて時雨や思てわけん

一八五三

佐良之奈里

嵐ふく山の月か行杖なからよもやこしなのまとの白雪

一八五四

富士山

ほとゝきすなくや七月もまたしらぬ雪はふしのねいつとわくらん

一八五五

淨見關

きよみかたなごにも浪の月を見てかたへもまたぬ風すゝしき

一八五六

武蔵野

むさしのゆかりの色もどひわひぬみながらかすむはるのわかきさ

一八五七

白河關

くるとあくと入を心にまくらせて雪にもなりぬ白河の關

一八五八

阿武隈河

思ひかねつまとふらとり風さむみわふくま河の名をやたつぬる

一八五九

安達原

しくれゆくのわたちはらのうす霧にまたそわはてぬ秋さくもれる

一八六〇

鏡家

宮城野

うつりあへぬ花のちくさにみたれつゝ風のうへなるみやきのつゆ

一八六一

安積沼

ふみしたくわさかのぬまの夏草にかつみたれそふしのふもちすり

一八六二

塩竈浦

霞ども花ともいはしはるのかけいつこはわれとしほかまの浦

一八六三

建曆二年十二月院よりめされし廿首
冬日同詠廿首應 製和歌
從三位行侍從臣藤原朝臣定家上

春十首

かすか山みねのあざの春の色にたにの鶯いまやいつらし

一八六四

ヤくらあざのをふのうら風春ふけは霞をわくる浪のはつ花

一八六五

我ぞあらぬうくひすさふ花のかは今も昔の春のあけほの

一八六六

雲ちゆくかりのは風もほふらん梅さく山のありあけのそら

一八六七

あさみとり玉ぬきみたる青柳の枝もとをくに春雨ぞふる

一八六八

あつたまの年にまねる人までとさくらにかこつ春もすくなし

一八六九

たのむへき花のあるしも道たえぬさらによとほん春の山里

一八七〇

みよしのやたさつかはうちちの春の風神世もさかぬ花さみなさる

一八七一

いくかへりやよひのそらをうらむ覽念には春の身をわすれつゝ

一八七二

色にいてゝうつろふはるをどまれともえやはいふきの山ふきの花

一八七三

恋五首

をのつからみるあのうらにたつけふり風をしろへのみちもはかなし

一八七四

草のはらつゆをそゝてにやとしつるあけてかけみぬ月のゆくゑに

一八七五

なくなみだやしほの衣それなかなれすは何の色かしのはむ

一八七六

秋の色にさてもかかれなて蘆へくたなゝしを舟我やつれなき

一八七七

契りなきしすゑのはらのゝもとかしはそれともしらしよそのしもか

一八七八

雑五首

あとたれてちかひをあかく神もみな身のことほりにたのみかねつゝ

一八七九

ひさかたのくものかけはしいつよまよひとりなきのくちてやみぬ

一八八〇

思ふことむなしき夢のなかそつたにたゆともたゆなつらきたまのを

一八八一

日かけさすをどのすかた我も見えおいすはけふの千世のはしめに

一八八二

ふしておもひおきてさいののとかなれようつよてらせくものうへ

の月

一八八三

後仁和寺宮月なみの花鳥の哥のゑにかゝるへき事

あるをふるさうたかすのまゝにありかたくなは今よ

みてもたてまつるへきよしおほせられしかは

詠花鳥和歌 各十二首

参籠藤原

正月 柳

うちなひきはるくる風の色なれや日をへてそむるあまやきのいと

一八八四

二月 桜

かさしおるみちゆき入のたもとまきさくらにゝほふきとらきのそら

一八八五

三月 藤

ゆくはるのかたみとやさく藤のはなそまたにのちの色ゆかりに

一八八六

四月 卯花

白妙の衣ほすてふ夏のきてかさねもたわにせける卯花

一八八七

五月 蘆橘

ほとゝきすなくや七月のよとかほにかならずにはふきのきたち花

一八八八

六月 常夏

大かたの日かけにいとふみな月のそらさへおしきとこ夏の花

一八八九

七月 女郎花

秋ならてたれもあひみぬ女郎花契りやまきし蘆合のそら

一八九〇

八月 鹿鳴草

秋たけぬいかなる色とふく風にやかてうつろふもとあらのほき

一八九一

九月 薄

花すゝき草のたものとつゆけさすてゝく水ゆく秋のつれなき

一八九二

十月 鶺鴒

十月も世のきくのにははずは秋のかたみになをこかまし

一九九三

十一月 枇杷

冬の日の本草のこさぬ霜の色を葉かへぬ枝の花をまかふる

一九九四

十二月 早梅

いろうつむかきねの雪のころながら年のこなたに匂ふ梅かえ

一九九五

鳥

正月 鶺鴒

春きてはいく世もすぎぬあせといてつくひすきるまとのむら竹

一九九六

二月 雉

かり人の霞になごるはるの日まつまどふ雉のこゑにたつらん

一九九七

三月 雲雀

すみれとひはりのとこにやとかりて野をなつかしみくらす春哉

一九九八

四月 郭公

郭公しの心の里にさとなれまたたうの花のさ月まつころ

一九九九

五月 水鶴

まきのときたぐくひなのあけほのに入やあやめのさきのつりか

一九〇〇

六月 鶺鴒

みしか夜のつかはにのほるかより火のはやくすみゆくみな月のさら

一九〇一

七月 鶺鴒

ななき夜にはねをならふる鶺鴒とて秋まちわたる鶺鴒のはし

一九〇二

八月 初鴈

なかくつ秋の半も杉のとこまつほとしるき初鴈のこゑ

一九〇三

九月 鶺鴒

人のさへいとふかくさかれぬとや冬待しもに鶺鴒なくらん

一九〇四

十月 鶺鴒

ゆふ日かけむれたるたつばざしなからしくれのくもや山のくりする

一九〇五

十一月 千鳥

千鳥なくかもの河せのよはの月ひとつにみかく山あゐのそて

一九〇六

十二月 水鳥

なかめする池の水にふる雪のかさなるとしをこしのけ枝

一九〇七

仁和寺宮五十首

詠五十首和歌

春十二首

初春

春の色とたのむまてやはなかめつるいふ許なる山の霞を

一九〇八

雪中鶺鴒

松の葉はいまもみゆきのふるさとに春あははるうつくひすのこゑ

一九〇九

橋辺霞

影たえてしたゆく水もかすみけりはまなのはしの春のたくくれ

一九一〇

行跡梅

玉梓のゆくて許を梅花うたて匂ひの人したふらん

一九一一

春月

山のはも霞のほかの花のかにこのころふかさいさよひの月

一九一二

岸柳

をそくとさいつれの色に契らん花まつ比の岸の青柳

一九一三

旅春雨

たひまぐらやもかくれぬ塵の葉のほとなきとこにはる雨たふる

一九一四

速帰鴈

いくかすみゆくの、すゑはしら雲のたなびくやうにかへる鷹かね 一九二五

山花

あしきの山くらうをまねにあけて花をそあるし誰をまつ覧 一九二六

閑花

さくら花たか世のわか木ふりはて、すまのせきやのめとうつむらん 一九二七

庭花

跡たえてとはれぬ庭の、けの色もわする許に花をちりしく 一九二八

河歌冬

山吹の花にせかるゝおもひ河浪のちしほはしたにやめつゝ、 一九二九

夏七首

杜卯花

みぬさとのみわのはうりやうへをきしゆふして白くかくる卯花 一九二〇

早苗夕

うへくら才線のさなへさとこに民の草葉のかすも見えけり 一九二二

里郭公

ほととぎすたれしのふとか太花木のふりにし里を今もとらん 一九二二

岡郭公

またしらぬまかへのやとの郭公よそのはつねにきゝかなやまむ 一九二三

夜盧橘

たちはなの花ちる里の夕つくよそらにしられぬ影やのこらむ 一九二四

籬壁麥

なてしこのたのむまかきもたわむまで夜のまの露のぬけるしら玉 一九二五

江螢

こきかへるたなゝしを舟おなし江にもえて螢のしるへかほなる 一九二六

秋十二首

早秋

あまの河わたせの浪に風たちてやゝほとちかき鶴のはし 一九二七

萩露

わきてよもあまふ雁のまきもせしやとからふかき萩のあざ露 一九二八

萩風

今よりのゆふくかかゝつ下萩を打つけにふく秋のはつかせ 一九二九

尋虫声

まつむしのなく方遠くさく花のいろくおしき露やこほれむ 一九三〇

山家月

月ならてたれそま山のかけはかりふかきしはやの秋まとはまし 一九三一

野怪月

武蔵野はゆきくほどの速けれは月を衣にきぬ人そなき 一九三二

船中月

しらすりき秋のしほちをこく舟はいか許なる月をみるとも 一九三二

暁鹿

なかき夜にあかすや月をしたふらんみねゆくしかのあり明の声 一九三四

河霧

あすかゝはふちせもしらぬ秋のきりなにゝふかめて人へたつらん 一九三五

袴衣幽

秋風にさすはれきえてうつ衣をよはぬ里のほとそぞ聞ゆる 一九三六

夕紅葉

龍田姫くものはたてにかけたをる秋の衣はぬきもさためす 一九三七

残菊匂

をきよめていくよつもれる匂ひともいさしら菊の花のした露 一九三八

冬七首

朝時雨

秋すぎ猶つらのしきあむほらけそらゆくも打しくれつゝ

一九五九

竹霜

いつ世までなれてふりぬる河竹のまたしたかけに霜をまきやふ

一九四〇

池水鳥

にほとりのしたのかよひもたえぬらむのこる浪なき池の水に

一九四一

鷓鴣鳥

はまひざしなげのかたみか友千鳥とわたりすつる沖のこしまに

一九四二

松雪

したゝへすゝすおれふすよなくに松ゝそうつめ暮の白雪

一九四三

湖雪

にほのりみやみきはほかの草木までみるのなきさの雪の月かけ

一九四四

惜歳暮

思やれすかにものゝと許もつらみねふしにつもる年々

一九四五

恋六首

いゝま山いさむる峯にゐるくものうきて思ひは消る日もなし

一九四六

寄露恋

道のへのあだなるつゆをゝきとめてゆくてにけたぬ恋すかなしき

一九四七

寄煙恋

如何せんあまのものほひたえすたつけふりによはる浦風もなし

一九四八

寄草恋

すゑまでとたれか契りし秋の霜音かたりの庭のした草

一九四九

寄鳥恋

会坂のゆきこにたつる鳥のねのなくくおしきあか月さうき

一九五〇

寄枕恋

思いるちきりのほともみしかよのはるのまくらに夢はさめにき

一九五一

雑六首

晝述懐

をのつからまたありわけの月をみ了むともなしのうきにたへける

一九五二

閑中燃

つくくごのけゆくまごのとも火のありやと許とふ人もなし

一九五三

山旅

わきてなと我しもたへぬ露けそ山ちは誰もたひんぞゆく

一九五四

海旅

あくる夜のゆふつけとりにたちわかれ浦浪とをくいつるふな人

一九五五

野旅

のへのつゆつりにけりなかり衣袂のしたはをわくとせしまに

一九五六

寄松祝

おほかたの松のちとせはふりぬとも人のまごとは君ぞかすへん

一九五七

権大納言家世首

詠三十首和歌

早春霞

たちそめてけふやくかのあままたき霞もなれぬはるのさ衣

一九五八

沢春草

いつの日か色にはいても夜のつるなくや沢への雪のした草

一九五九

晝梅

まきのどの枝わたる梅のつりかもあかね別のありあけのかけ

一九六〇

花満山

花かりそらにしろわれぬ白雲はたなびきのこす山のはもなし

一九六一

江上暮春

ほり江こく霞の舟行なやみおなし春をもしたふ比哉

一九六二

溪卯花

かへるぞの夕は北にぶく風の波だててふる岸の卯花

一九六三

野郭公

智きのこのしたつゆに郭公ぬれてやきつる涙かるとて

一九六四

雨後鶴河

うかひ舟むらぎのすするかくり火にくもまのほしのかけそあつてふ

一九六五

月前萩

萩の葉も心つくしの声たてつ秋はきにける月のしるへに

一九六六

夕虫

つれごと秋の日をくるたすかれにとぶ人わかぬまつむしのこゑ

一九六七

海辺鹿

秋のしかのわか身こそ浪少風につまをみぬめのうらみでやなく

一九六八

閑庭薄

まねくとて草のなもとのかひもあらしとはれぬ里のふるさまかきは

一九六九

名所摘衣

冬方の桂のさこのさよ衣おりはへ月の色にうつなり

一九七〇

朝寒蘆

あざしものいかにをまけるあしのはの一夜のふしに色かはる覽

一九七一

深夜千鳥

をのれなけいそくせきちのさよ千鳥どりのさらねも声たてぬまに

一九七二

故郷雪

みよしのはまれのとたえのくもまとして昨日の雪のきゆる白もなし

一九七三

聞声恋

いへはえにまぎふる袖も朽はてぬたまのまごこの秋のしらへに

一九七四

稀恋

まちわたるあふせつらやむ天河そのほとしらぬ年の契に

一九七五

増恋

色わかぬやみのうつこのひとことに袖のちしほはいとそめつ

一九七六

怨恋

かけてたに又いかさまにいはみかた猶浪だかき秋のしほ風

一九七七

被志恋

身をすてて人のいのちをくしむともありし誓のおほえやはせん

一九七八

旅行

かへり見るその梯はたちそひてゆけはへたゝる峯のしらくも

一九七九

旅宿

山かけやあらしのいはのさ、枕ふしまちすきそ月もとひこす

一九八〇

旅泊

こきよせてとまるとまりの松風をしる人かほにいそくれ哉

一九八一

山家松

しのはれむ物ともなしにきくら山のきはの松子なれてひせしき

一九八二

山家橋

竹の戸の谷のしほしあつたためて猶よをわたるみちしたふらし

一九八三

山家苔

しられないはのしたかけやとふかき苔のみたれて物思ふとも

一九八四

寄神祇祝

かすか山峯のこのまの月なればひたりみきにそ神もまもらん

一九八五

寄水懐旧

せく人もかへらぬ浪の花のかけつきをかたみの春そかなしき
寄雲 述懐
一九八六

なへて世のなまげゆるさぬ春のくもたのみし道はへたてはてつき
一九八七

寛喜元年十一月女御入内御屏風和哥
月次御屏風十二帖和歌

定家

正月

元日

やとことこにみやこはるるのはしめとて松にそきみの千世いはふなる
一九八八

若菜

とふひのはまたふる年の雪まよりめくむわかなき春いそぎける
一九八九

霞

春のさるたもとゆたかにたつ霞のくみあまねきよもの山のは
一九九〇

二月

梅

野も山もおなし雪とはまかへとも春は木毎に匂ふ梅かえ
一九九一

柳

浪のよる柳のいとこの打はへていくちよふへきやとくかはしる
一九九二

網

まぐあみの霞をむすふ春風に浪のかさしの花さきそふ
一九九三

三月

桜

山ざくら花のしたびも時しあればよなから匂ふはるの衣手
一九九四

歎冬

谷河の春もちしほの色そめてふかきやよひの山吹の花
一九九五

紫のくものしるしの花なればたつ日もおなしやとの藤浪
藤
一九九六

四月

更衣

もう人の袖もひとへにましなへて夏そ見ゆれけふきたりとほ
一九九七

萩

粉萩
久方の柱にかくるあふひ草そらの光にいく世なるらん
一九九八

早苗

を山たのむろのはやわせとりあへすそよくいなはのこらやまつらん
一九九九

五月

菖蒲

いつかとそまぢしぬま江のあやめくさけふそそなきためしにはひ
二〇〇〇

け

郭公

ほととぎすをのかときはのもりのかげおなしそ月のこゑもかはらす
二〇〇一

瞿麥

さきまざるいやはつ花の目をへつまかきにあまるやまとなてし
二〇〇二

六月

山井

たつねても夏にしられぬすみか哉杜のした風山の井の水
二〇〇三

納涼

風渡はまづつかえのたむけくさなひくにつけて夏やすきぬる
二〇〇四

六月 萩

夏衣おりはへてはす河波をみそきにぞふるせのゆふして
二〇〇五

七月

秋風

おきつ浪あざけすしき秋風もまつのちとせせくらにきこゆる

二〇〇六

野花

もう人の心いるらしあつさきひくまのへ秋秋の花

二〇〇七

虫

山さとのこやまつむしの声までもさむらここちよいのる也

二〇〇八

八月

草も木も色のちくさにをりかくる野山のしきしかそたちける

二〇〇九

鹿

こはりのひかりさしそへ夜はの月あきらけき世の秋の半に

二〇一〇

月

秋きりのたつやとまちしこしちよりけふはみやこのはつかりの声

二〇一一

九月

老をせく菊のした水手にもすふこの里人の十世もすむへき

二〇一二

菊

民の戸のあまつそなる秋の日にはすやをしねの秋もかさらす

二〇一三

田家

たつたひめ了そののつゆの紅に神世もきかぬ峯の色哉

二〇一四

紅葉

池にすむをしのけ衣よをかきねあかすみなる水のしら波

二〇一五

十月

淡路しまゆきゝの舟の友かほにかよひなれたるうらちどり哉

二〇一六

水鳥

千鳥

網代

あしう水や浪のよるくゝてる月につもるこのはのかすもかくれす

二〇一七

十一月

浦にすむたつのうへにとをくしもはちよふる色ぞかねて見上げる

二〇一八

鷹狩

いはせのやとりふみたてはしたかのこすもゆらに雪はふりつ

二〇一九

炭竈

くにとめる民のけふりのほど見えて雲まの山にかすむすみかま

二〇二〇

十二月

にはの海や水までらす冬の月浪にますみのかみそしへ

二〇二一

氷

みよしのみゆきふりしくさことからは時しもわかぬありあけのさう

二〇二二

雪

あしひきの山ちにふかき朱の戸も春の隣は猶やわすれぬ

二〇二三

歳暮

泥松御屏風

二〇二四

石清水臨時祭

ちりもせし衣にすれるさ竹の大宮人のかさす桜は

二〇二五

重陽宴

このへのとのへもはふ菊のえに詞のつゆもひかりそへつ

二〇二六